コミュニケーション理論：その発展の歴史と将来への展望

蔵元　禮子

Ⅰ．はじめに

人間のコミュニケーションに関する研究は、記録の残る限り古くは古代ギリシャ・ローマ時代に遡り、その研究内容・手法を様々に変容させながら現代に継承されている。しかし一方では、コミュニケーション理論の存在そのものや研究内容・手法に対しての批判が絶えないのも事実である。例えば心理学のように、ある一定の評価を得ている社会行動科学分野もあるが、コミュニケーション領域に関しては、その意義・重要性は認められるものの、多くの理論がその信憑性を問われている。そのような批判に対しての反省と挑戦は必要であるが、前進への手がかりを求める意味で、まず、コミュニケーションに関する学問的体系化過程の大きな流れを掴むべく、その発展の歴史を振り返ってみたい。小論のテーマを大仰にも、「コミュニケーション理論：その発展の歴史と将来への展望」としたが、その内容はかなり大雑把な歴史的概観となっている。初めにコミュニケーション教育の目的とコミュニケーション理論のパラダイムについて、次に、古代から現代に至る理論の発展過程について、そして最後に将来への展望についての一考、という展開で歴史を振り返ってみたい。

Ⅱ．コミュニケーションに関する教育及び学問的体系化の歴史

コミュニケーションに関する学問的体系化の歴史は、そのルーツをヨーロッパにおくものの、近代社会における大学教育のカリキュラムに適応した形に体系化され、その多様化が積極的に進められたのは、アメリカにおいてであった。その始まりは、ハーバード大学が設立された1636年であると言われる(Friedrich & Boileau,1999)。

当時のハーバードは、福音伝道の目的で、聖職者を育成することが、その教育内容の中心であった。より具体的には、議論を通し教会の正当性を世に証明できるargumentation（議論）能力を備えた聖職者の養成である(Craig, 1989)。

ケンブリッジやオックスフォードに劣らない大学作りをめざしていたハーバードは、そのルーツをヨーロッパ最初の大学、the University of Parisにまで遡ることから、教育内容もその流れを汲んでいた。従って、設立当初は、the Seven Liberal Arts（七大リベラル・アーツ）やthe Three Philosophies(三大哲学)に加え、Superior studyとされるLaw, Medicine, Theology（法律・医療・神学）がラテン語で教えられていた(Morison, 1935)。

ちなみに、七大リベラル・アーツとは、the Triviumとして分類されるGrammar, Rhetoric, Logic（ラテン語文法・レトリック・理法）、そして、the QuadriviumとされるMusic, Arithmetic, Geometry, Astronomy(音楽・算術・幾何学・天文学)であり、三大哲学科目とは、Physics, Politics/Economics, Metaphysics(物理学・政治/経済学・形而上学)である(Morison, 1935)。この創立当初のラテン語による教育も時代の流れに合わせることが余儀なくされ、徐々に英語も当用されるようになる。必然的に教材の多様化も進み、それに伴い、様々な科目がカリキュラムに加えられた。

アメリカでは1860年代から教育組織における「学部化」の動きが活発になっていき、1900年代初頭までには、様々な学部が高等教育機関に設立されるに至った。1920年代から40年代にかけるラジオ・テレビ等の通信技術の革新も相まって、情報量がにわかに急増すると、コミュニケーションに関する研究の必要性がより強く認識さ

れるようになった。Forensics, Logic, Rhetoric, Debate, Public Speakingなどに加え、スピーチ・セラピー(1920年代)、ラジオ放送関連科目(1930年代)、グループ・ダイナミックやリーダーシップ、そして、対人コミュニケーション(1950年代)など、広い領域にわたる学問的体系化が推し進められた。この頃から、他分野、特に心理学・社会学・文化人類学・政治学などにおいても、コミュニケーションに視座をおいた研究が活発に行われるようになった(Cohen, 1994)。

高等教育における「学部化」の動きは、コミュニケーション学にも学部としての独立をもたらすことになった。前述したように、ハーバード大学における「議論能力養成」にその起点をみる現代のコミュニケーション学部の存在は、「国語科」であるEnglish Departmentから分離する形で始まった。それまで、アメリカの大学では、English Departmentで、英作文・スピーチなどが教育されていたが、コミュニケーション研究が多岐に渡るようになると、言語以外の諸々の要素を含む研究が必要になった。哲学・心理学・社会学・文化人類学・政治/経済学など、多くの分野を取り込んだ学際的なコミュニケーション理論の研究が進むにつれ、自然にEnglish Departmentから独立する形になったのである。その名称も、1920年代にDepartment of Public SpeakingからDepartment of Speechへ、さらに1960年代Department of Speech Communicationへと変更された。ＩＴ化によって通信・情報分野でも研究の多様化が進む現在では、多くの大学でDepartment of Communicationという名称が用いられている。ちなみに、日本の大学で初めてコミュニケーション学部を設けたのは東京経済大学で、1995年のことであった。アメリカでは、1995年度版Speech Communication Association Directoryに登録されているコミュニケーション学部を持つ大学の数は861である(SCA Directory,1994-95)。

学部の独立とともに、学会も、又、独立の道をたどる。全体主義国家の勢力増によって、言論の自由が奪われそうな危機が迫った20世紀初頭、the National Council of Teachers of English (NCTE)から分離独立、the National Association of Academic Teacher of Publicという学会(1914)が設立された(Cohen, 1994)。フォーマルな演説にとどまらない、口述のsymbolic interaction（象徴的相互作用：記号を媒体とする社会的相互作用）の多角的視点からの研究をめざし、現在はその名称をＮＣＡ，the National Communication Associationと変え、多岐にわたる研究が活発に行われている。

Ⅲ．コミュニケーション理論の発達

１．コミュニケーション教育の目的

コミュニケーションに関する理論の体系化の足跡を追う時、ハーバードを遠く越えてソクラテス以前の古代ギリシャ・ローマ哲学に遡ることができるのだが、まずは、現代教育の場で掲げられている教育目的について述べるとする。Infante, Rancer, Womackは、*Building Communication Theory*に、コミュニケーション教育の目的を、これ以上ない明瞭さで記している。"A major goal of the field of communication has been to prepare students to be effective participants in a democracy."(Infante et.al., 1993: p.30) つまり、民主主義社会の一員たる有益な人材の育成、であると。

「自由社会の第一の特徴は、marketplace of idea（アイデア市場）である。アイデアのある人がそれを外に表出する。有益なアイデアは選択され、他のアイデアとの競争に打ち勝つ。市場原理では、ベストなアイデアが生き残ることが前提とされている。言論の自由とは、多種多様なアイデアが市場に加入でき、その中から人々が選択できる自由を保障する理念である。より多くのアイデアが自由に市場にもたらされることによって、より良い選択ができる確率が高くなる。この過程を通して、社会全体がよりよい方向へと進化する。」(ibid.,p.29：蔵元訳)

つまり、自由社会では、個々人が自由に発言することやより良いアイデアを選択することが進化の必要条件とされ、社会人たるものの資質としてコミュニケーション能力が必要不可欠になる、と言うわけである。

視座を広げて、高等教育一般のゴールを検討してみると、San Jose State University, Jo Sprangueが、次の４点を挙げている(Sprangue,1999)。

1. to transmit cultural knowledge.（文化の知識を継承する）
2. to develop students' intellectual skills.（学生の知性をのばす）
3. to provide students' with career skills.（学生にキャリア形成スキルを提供する）
4. to reshape the value of society.（社会価値の再構築をする）(ibid., pp.16-17)

上記４点を鑑みるに、コミュニケーション学部の教育目標とは、これら高等教育のゴール達成に必要不可欠なコミュニケーション能力の育成であると言える。大学の使命の一つには、生涯学習(lifelong learning)の基盤となる、より普遍的な概念・原則(the more universal principles)を学生に学ばせることが挙げられると思うが、コミュニケーション学部のもつ使命の重要性は、その教育内容が、他分野の学問全ての基礎となる点にあると言える。つまり"communication skills are essential to gaining other knowledge" (ibid., 1999: p.20)、コミュニケーション能力をもってこそ多分野の知識習得がなされるものである点に尽きる。

もう一点特記すべきことは、コミュニケーション教育では「口述」によるコミュニケーション能力育成に重点が置かれることである。一般に、大学での「講義形式」の教育は、古代から中世期に教科書やノート類の数が少なく、伝統・知識の継承を口述で行わざるを得なかったところに起因するという見方がされるが、the Foundation of Harvard Collegeの著者、S. Morisonは、これが最大の原因ではないという。それよりも、口述による言葉が若者に与えるインパクトの強さが主たる要因であり、その証拠は、古代から現代まで、様々な教育様式が開発され続けているにも関わらず、講義という形が今尚存続するという事実そのものであると（Morison, 1935:p.22）。従って、アメリカにおけるコミュニケーション学部に課せられた教育使命は、主に、口述メッセージの発信・受信能力育成であることを留意されたい。

２．コミュニケーション理論

これから、コミュニケーション理論について、⑴古代、⑵中世、⑶現代、に大きく時代区分し、その発達過程について基礎的な知識を追っていくが、その前に、理論の機能と、コミュニケーション理論のパラダイムについて簡単に触れておくことにする。

⑴ 定義

①理論（セオリー）の定義：ギリシャ語のテオリア（theoria）に由来し、基本的には眺めること、観照することを意味した。哲学・思想辞典には、「科学において、観測可能な現象や、経験法則（経験、観測に基づいてその成立を確かめることができる法則）に対して、その説明を与えるような法則の体系」とある（丹治、1998: p. 1694）。

②理論の機能：機能その１は、事象を統一的に捉えることである。その２は、既存の知識を拡張すること、その３は、将来の研究への指針を示すこと、そして最後に、未知の現象を予見することである（Infante et al.,1993: p.45）

上記の定義と機能に基づいて、コミュニケーション理論は、人間社会における最も基礎的なsymbolic interaction（象徴的相互作用）の過程や機能を分析・説明するものである。さらに、人間存在とその社会的営みを理解するため、様々な社会現象を分析する上での重要なツールとなる必要がある。

⑵ ３つのパラダイム/視座(theoretical perspective)

ここではパラダイムを理論構築のための視座という意味で取り扱う。人間のコミュニケーションには、その内容や形式を規定する政治的・社会的・文化的諸条件があまりにも複雑に関わりすぎるため、その学問領域・研究方法などは、実に様々な変容を遂げてきた。紙幅が限定されることから、本稿では、代表的な３つのパラダイムのみを取り扱うこととする。

① **The Covering Law Perspective**

このパラダイムは、別名、論理実証主義モデル(the logical positivist model)とも呼ばれ、1960年以前は化学・物理学で、その後、心理学などの社会行動学で用いられた。If X, then Yの公式に表されるように、鍵概念は因果関係である。自然現象には、何らかの規則があって、Xが原因でYが起こる、の普遍法則を見出すことによってある現象が何故そのように起こるのかを「知る」ことができるという考えが前提にある。

コミュニケーション理論の構築に当たっては、「人がそのように振舞うのは、ある先行条件によって引き起こされた刺激に反応するからである」という因果関係の研究として応用された。

このパラダイムによるコミュニケーション理論構築は、イエール大学のHovland, Janis, Kellyによる、態度変容と説得に関する研究に代表される。これは「イエール・コミュニケーション研究」と呼ばれ、認知的学習理論に基づき、"opinions, like other habits, will tend to persist unless the individual undergoes some new learning experiences"(Hovland et al., 1953: p.10)つまり、「人の意見は、その人が新しい学習経験をしないかぎり変わらない」という前提で、態度変容と説得の要因を分析的手法で追求したものである。

この大掛かりな因子分析研究によって、コミュニケーション理論は大きく進展することとなった。Hovland等が、態度変容はコミュニケーションを通して行われるという点を強調したことによって、コミュニケーションを視座に置いた人間行動の研究が重視されるようになったからである。これより20年間、70年代に至るまで、社会科学的アプローチによる研究が盛んになったことは、彼らの大きな貢献である(Infante, et al., 1993)。

しかし、イエール研究は、人間がある刺激に反応するという前提での研究範囲に限定され、しかも、能動的なコミュニケーションではなく、研究のためにコントロールされた状況下での被験者の反応に基づいていた。これは、意思や感情を持った動物である人間の能動的なコミュニケーションに関する研究としては、大きな欠陥を持っていると言わざるを得なかった。人間のコミュニケーションは、常時変化する物理的・心理的環境の中で起こる現象として研究されるべきであり、変化しない環境を前提に、AがBを引き起こすというような単純な直線的因果律では、複雑な要因が絡むコミュニケーション過程を十分に説明することはできなかったのである。

② **Human Action Perspective**

自然科学のパラダイムを用いて人間行動を研究することに疑問を抱いた人々は、人間が森羅万象の中で「質的に」異なる存在である点を重視した。人間は考える葦であり、思考と感情によって意思決定をする能動的な(proactive)生き物である。従って、刺激―反応という条件反射的な規則を見出そうとするより、個々人の知覚、すなわち、ものの捉え方に焦点を当てる必要性があるという点を主張した。起こる事柄・現象そのものよりも、それらの「捉え方」が人の行動を左右するという考えである。人は各々の知覚で捉える現象を「現実」と考える傾向があり、よって、絶対現実の存在を前提にするthe Covering Law Perspective派の学者達とは正反対の視点に立つ。

Human Action Perspectiveの立場を取る学者の代表的な人物としてはWinchが挙げられる。The Covering Law Perspective派のようにコントロールされた環境での実験・観察をもとに人間行動を分析するのではなく、彼は観察者が被験者と共に実験に参加する形での研究を提唱し、これによってparticipatory research(参加型)という分析手法が考案された。

社会学者Schutzもまた、人は将来成し遂げたいゴールに向かって進む性質を持つこと、そして、そのゴールへ向かう姿勢によって個々人の「現象の捉え方」に差異が生じるものであることを、because motive(過去の要因)やin-order-to motive(未来の要因)という概念を用いて説明しようと試みた(Schutz, 1967)。The Covering Law Perspective派が過去の経験をもとに刺激に反応する点を主張したのに対し、Schutzの方は、人は過去の要因より未来の要因に強く影響されるという主張で

あった。Human Action Perspective派は、in-order-to motive（未来要因）の方が人間の行動・物事の解釈の仕方に強い影響を与えるとするSchutzの考えを支持している。

このパラダイムは、人間の本質をより深く捉えたものであり、メッセージに込められた深い意味を捉えようとした点に置いて、優れていると言える。客観的に観察し得ること以上に、観察し得ない人間の内面は複雑であり、しかも、その見えない精神的な部分こそが人間をその他の生き物と区別する重要な要素であるからである。しかし、質的な側面を深く捉えたものの、その分、科学的実証性を満たすデータが少ないこと、そして、個々の差異を重視することから、必然的にその結論に一般性と予測性が欠如する点などの弱点が挙げられる。

③ The Systems Perspective

生物学者L. von Bertalanffy(1968)による一般システム理論、The General System Theoryは、自然科学のみならず、コミュニケーション理論構築にも強い影響を与えた。システムとは「相互作用している諸要素の複合体」（『一般システム理論』長野・大田訳、1973: p.31）、"complexes of elements standing in interaction"(Bertalanffy, 1968: p.33)である。 コミュニケーション学者Infante等の言葉を借りれば"A system is a set of interdependent units which work together to adopt to a changing environment."となる(Infante, et al., 1993: p.90)。この変化する環境への適応は、オープン・システムに置けるフィードバックという鍵概念によって説明されている。この開放システム(open system)という概念は、コミュニケーション理論構築上でも大変有益で、コミュニケーションを、ある個人と個人が交流する単独の行為としてではなく、環境全体と相互作用するオープン・システムの過程として捉えるべき研究の方向性を与えてくれた。

システム理論の鍵概念は、コミュニケーション理論の中でも特に組織や家族という概念を扱う上で多く適応されている。例えば、キャノン（W.B.Cannon）によるホメオスタシス(homeostasis)は、システムが環境の変化に応じ均衡を保つために行う自動調節であるが、これを家族や組織というシステムに当てはめると、一人のメンバーに起こる変化は、必然的に他のメンバーにも変化を余儀なきものとし、メンバーは相互のフィードバックを通して新しい形の定常・均衡状態(equilibrium)をめざし調整を続けると考えることができる。制御システム理論である、MIT科学者Wienerによるサイバネティックスは、「人工機械でも生物体でも社会的システムに置いてもフィードバックの性質をもった機構が目的論的あるいは目標指向ふるまいの基礎になっていることを示そうとするもの」である（『一般システム理論』長野・大田訳、1973: p.40）。サイバネティックスの中心概念となっているフィードバックも、家族や組織内コミュニケーション過程を分析する上で有用である。この考えを応用し、家族・組織・メディアなどをシステムとしてとらえ、情報処理過程(information processing)としてのコミュニケーションというアプローチで理論構築が行われるようになった(Griffin, 2003)。これを基に考案されたモデルが、the mathematical theory of communicationのShannon-Weaver model（別名 the linear model、直線型モデル）である。

システム理論のもう一つのユニークな鍵概念「等結果性」equifinalityも同様に有益である。等結果性とは、ある同じ最終結果に到達するにしても、そこへ到達する方法は一つではなく、異なった初期条件や異なった方法によっても可能であるという意味であるが、意思力を持つ人間は、それこそ千差万別、ありとあらゆる方法でゴール達成を試みる。

これらのことからも、システム理論はコミュニケーション理論構築のパラダイムとして、特に３つの点でより理想的であると言えよう。１つは、各部分は交流し合い、全体として機能すると指摘している点。人もまた人・社会と交流し、システム全体として機能している。２つ目は、環境との適応について触れている点。人間のコミュニケーションもまた、その環境との関係を考えることなく論じることはできない。３つ目は、行為としてではなく、過程としてシステムを論じている点。コミュニケーションも、そ

の始まりと終わりを明確に区分できない過程である。そして、人間そのものが複雑なシステムである上、それを取り巻く環境もまた複雑きわまりなく、より広範囲のシステム及びサブ・システムの交流を「過程」として捉えることによって、コミュニケーション・システムの全体像に近づくことができる。

しかし、この、より理想的とされるパラダイムにも弱点はある。広範囲にわたるさまざまな要因の複雑な相互作用の過程を取り扱うことは、理想ではあるが実証的研究が困難である点、そして、結論が一般論になりがちで説明力に欠ける点などが挙げられよう。

Ⅳ．コミュニケーション理論：古代・中世・現代

これまで述べたパラダイムを念頭に置きながら、ここからは、コミュニケーション理論の発展史を振り返ることにする。その過程で、大雑把ではあるが、古代から近代にかけて起こった①②③のパラダイム・シフトも合わせ概観できよう。ただし、古代・中世・現代と言っても、通常の時系列的歴史区分ではなく、コミュニケーション理論発達史の観点から特徴づけられる三時代という意味での区分とし、各時代を代表する人物１～２人を中心に概要をまとめることとする。

１．古　代

Ａ．前ソクラテス期

コミュニケーションに関する研究の歴史を遡れば、必ず行き着くところが哲学である。彼らの形而上学と近代のコミュニケーション論を同義的に扱うことはできないが、現代に継承されている森羅万象の存在や言葉を使う人間の特殊性についての研究のルーツはそこにある。前ソクラテス期の哲学者で、現代のコミュニケーション学に影響を及ぼしている人物として、パルメニデス(544～501B.C.頃)とヘラクレイトス（535～475Ｂ.Ｃ.頃）が挙げられる。前ソクラテス期の彼らにとって考えるに値することとは、宇宙の起源とその存在理由、そして人間の生死の不思議についてであった。しかし、パルメニデスとヘラクレイトスとでは、その研究方法が正反対であった。パルメニデスが人間の感覚は信頼に値しないもので、理法、logicのみが真理に至らしめる手法と考えたのに対し、ヘラクレイトスは、人間は自然の一部であり、人間も自然の法則に従って機能するものであると考え、人間の感覚に信頼をおく立場をとった。そして、人がものを対立において考えるという思考のあり方について考え、万物の生成消滅に着眼し、「パンタ・レイ」panta rhei（万物は流転する）の世界観を打ち出した。ただし、「パンタ・レイの思想をヘラクレイトスと結びつけたのは、プラトンである」とされる(内山、1998: p.1451)。世界は常に変化しているまさにそのことによって秩序的に統一されているという考えである。

彼らは演説法や説得術を研究していたわけではないが、既に、前ソクラテス期から、現代に見られるthe Covering Law やシステム理論的パラダイムが設定され、変容を遂げながらも継承されてきたといえる。

Ｂ．ソフィスト期

紀元前５世紀ころ、ギリシャの都市国家では、支配階級家庭の子息は法廷弁論や政治討論に備え、弁論術を学ぶことが余儀なくされていた。都市国家ポリスの成員は、土地所有農民ならびに商工業者からなっており、個々の市民は「直接に国家の意志決定に参加し、国家の機構を運営した」（北畠、2000:p.45）。彼らに、都市国家ポリス各地を回りながら講師料を取ってレトリック（弁論術）を教えた人々がソフィストと呼ばれる雄弁家たちである。哲学者とは異なり、ソフィストは相対的な価値観をもって、それぞれの弁論術を説いた。ちなみに、Sophistとは、ギリシャ語のsophosが語源で、英知を意味する。英語のプロフェッサーに最も意味が類似する言葉であるらしい(Guthrie, 1971)。

ソフィストで著名な人物は、ディベートの父と呼ばれるプロタゴラス(485～415B.C.)であろう。彼は裁判で勝利するための論法を研究し、コミュニケーション能力の高い者が低い者に優り利を

得ると主張、ディベートのあり方を体系化した。

プロタゴラスは、「万物の尺度は人間である。あるものについては有るということの、無いものについてはないということの」(三島、2000: p.36)という人間万物尺度命題を主張した人物としてプラトンによって書かれ、個人的相対主義者として理解されている。しかし、プロタゴラスの説くソフィストの使命は言論を用いて「魂の劣悪な状態によって、そうした魂の状態と同様のことを思っている者をして、有益な状態によって、そのようなことを思うようにさせる」(三島、2000:p.36)という一節から、プロタゴラスが倫理の領域における個人的相対主義を認めていなかった可能性を示唆する学者もある(三島、2000)。三島は、プロタゴラスが市民としての徳―――正義・節度・敬虔―――を人間の徳と同一視していることから、「人間としての人間に普遍的に妥当する倫理の可能性を考えていたことを示唆する」(三島、2000: pp.49-50)のではなかろうかとも述べている。ソフィストはアテナイ人ではない、外国人であったことやオリンピックで賞金目当てに雄弁を競い合ったことなどから、アテナイのポリス人からはあまり認められていなかったにもかかわらず、プラトンもプロタゴラスにだけは一目置いていたという(Zeller, 1980)理由が、ここにあるように思われる。

ここで特記しておきたいのは、アスパシアAspasiaについてである。通常、古代ギリシャ社会では、女性は家庭に閉じ込められ身分の低いものとして扱われていたが、貴族の女性は下層階級の女性よりは多くの自由が与えられていた。アスパシアは、そのような女性達のための学校で哲学やレトリックを教えていた女性のソフィストであった(Durant, 1939)。

C．哲学的レトリック期

ソクラテス(470～399B.C.)は「無知の知」を唱えたことで知られるギリシャの哲学者である。彼自身は一切の書物は記さず、弁証法(dialectic)という禅の公案ような問答・対話形式を用い、徳について講義を行った。但し、ここでの徳とは、当時のポリス的規範ではなく、無知を自覚する知の意味である。彼は、神は万有を善きものにしようとしているという「有神論的な目的論的世界観を持ち」(北畠、2000: p.90)、「人は神ではないので、徳に関する不十分な知しか有していない」従って「人間は己の無知を自覚して、この知を愛し求めるしかない」(北畠、2000: p.92)と考えていた。ソクラテスの弟子、プラトン、さらに、プラトンの弟子、アリストテレスらによって書かれたレトリックに関する書の中に、ソクラテスの足跡をたどることができる。プラトン作の Phaedrusに、その一部が記されている。Phaedrusの中のソクラテスは、レトリックを、公的集会や裁判などで言葉を使って人々を説得するだけの手段ではなく、"a kind of leading the soul by means of words"、つまり、言葉という手段を使って魂をよりよきものにするために使われるべきものであると述べている(Kennedy, 1980: p.56)。

紀元前9世紀から8世紀期の都市国家ポリス(アテナイ・スパルタ・コリント・テーバイなど)は、その政治形態は様々で、寡頭制もあれば民主制もあったが、ソクラテスが生まれた時代は、アテナイの政治家ペリクレス(490～429B.C.)が民主派の指導者として政権を掌握した民主政治の全盛期であった(高野、2002)。必然的に、ポリス市民は政治のみならず、土地所有権などの私的な問題についても、他者を説得できるようなスピーチの能力を修得せざるを得ない状況にあった(Infante et al., 1993.)。(古代のレトリックは、口述による弁論を意味する)

時を同じくして、ソクラテスの弟子であるプラトン(427～347B.C.)は、アカデミーという名の学校を設立する(Durante, 1939)。そのアカデミーで数学や哲学を学んだのがアリストテレス(384～322B.C.)であった。アリストテレスのRhetoric of Aristotleという本は、現代でいうハンドブックのようなものであったらしい。そのBook1には、有名な3つのプルーフ、説得の方法が記されている。エートス(Ethos)はスピーカーの人物としての信頼度、パトス(Pathos)は人の感情、ロゴス(Logos)は論理的正当性に訴える説得の方法である。3つのプルーフの他、アリストテレスは、序論・本論・証明・論駁・反対尋問・結論などのスピー

チの各要素についても論じている。万学の祖と称されるアリストテレスのコミュニケーション理論構築への最大の貢献は、公の場における演説の仕方について、秩序正しく、体系的にその原則を打ち立てたことにある(Thonssen, Baird, & Branden, 1970)。

前ソクラテス期からアリストテレスまでの期を経て、先人たちの書をもとに５つのキャノンと呼ばれる古典的パラダイムが確立したのが100～200B.C.であると言われている（Harper,1979）。これに大きな貢献を果たした人物が次に述べるキケローである。

２．中　世

Ａ．キケロニアン・レトリック期（Ciceronian Rhetoric）

紀元前338年、古代マケドニア王国のフィリッポス2世がギリシャの宗主権を手中にすると、ポリスはその独自性を失っていった。フィリッポス2世の子、アレクサンドロス大王(356～323B.C.)は東方遠征によって大帝国を築き上げ、古代ギリシャ文明と古代オリエント文明を融合したヘレニズム文明が生まれた。ちなみにアリストテレスはアレクサンドロスの皇太子期に家庭教師を務めた(Infante, et al., 1993)。

この時代の代表的修辞学者はキケロー（106～43Ｂ.Ｃ.）である。政治家でもあった彼は、ギリシャ哲学的なものとソフィスト的な内容を組み合わせ、アリストテレスのレトリックを基盤にしながら、発想(invention)・配列(arrangement)・文体(style)・記憶(memory)・発声(delivery)の５つのキャノン、canons（or the five arts or the five faculties, 能力の意）について精察した (Harper, 1979)。その著書De Oratoreで、キケローは弁論家(orator)の３つの任務について述べている：①取り扱った話の内容が真実であることを証明する、②聞き手の心をつかむ、③話の内容にふさわしい感情を聞き手の心に引き起こす。キケローのコミュニケーション学への貢献は、古典レトリックを精査し、あらたに論理的に体系化した点にある(Harper,1979)。キケローによると、コミュニケーションとは、人と人の交流に関する科学「森羅万象の源と意義と変化を、すべての徳とすべての義務の源と意義と変化を、また、人間の倫理的性格を律し、知性を律し、生を律するすべての自然的理法の源と意義と変化を包摂するもの、それが雄弁というものなのであり、同時にまた、習慣を、法律を、法を決定し、国家を統治するもの」(『弁論家について』大西訳、2005: p.156)であった。

Ｂ．ローマン・レトリック期(Roman Rhetoric)

アレクサンドロス大王の死後、マケドニア王国はローマ帝国の属国となるが、そのローマ帝国では、2世紀ごろまでにキリスト教がその教会組織の基盤を確固たるものにしていた。以後、キリスト教教会による福音解釈と伝道のための神学が教育の中心となり、コミュニケーション理論の視点からみる限り、そのパラダイムは宗教的なものに限られた狭隘なものになっていく。教育はポリス市民のためのリベラル・アーツ教育ではなく、教会でのキャリア形成をめざす人々のための、いわばエリート教育に転じていく。

古代ギリシャ時代は、小規模であるからこそ連絡網の行き届いた高コンテキスト（共有情報が多い）社会であったが、古代ローマ時代は、その領土を広範囲に広げたが故の低コンテキスト社会（共有情報が少ない）となった。必然的に、遠距離を結ぶ「手紙」のやりとりが、二つの機能、①情報源、②記録、として重要な意味を帯びてきた。このことから、レトリック研究に関しては、文体として書簡、口語体として説法という２領域に限られ、その他は世俗的なものとして排除され衰退していくことになる。そして、４世紀末までには、教育は「聖なるもの」divineと「世俗的なるもの」secularに２分され、「神学」に教育の最高の価値が置かれた。世俗的な教育として、七大リベラル・アーツ（p.27参照）があったが、いずれも高い価値を置かれたわけではない。古代ギリシャ時代には哲学・倫理・政治を含む深い内容であったレトリックも、全くその原形をとどめないほど表面的なスキルのみを扱う科目に質を落とされてしまった。

キリスト教教会が勢力を強めた社会における教育は、バイブルの正しい解釈とその伝導が目

的となり、記号学としての言語、特に意味論が重要になっていく。コミュニケーション学的には、「三位一体論」で著名なアフリカ生まれの司教アウグスティヌス(354〜430)によるOn Christian Doctrineが、中世を代表するテキストと考えられている。

アウグスティヌスの貢献は、コミュニケーション論の鍵概念であるsymbolic interactionという視点を打ち出したことである(Harper, 1979)。知識は「記号によって表されたもの(特にバイブル)を人間が解釈する」"human interpretation of symbolic representation"(Harper, 1979: p.77)によってのみ得られると指摘したアウグスティヌスは、神学の体系化をめざしていた。従って、アウグスティヌスの教育目的は、あくまで理想的なクリスチャン育成であった。これに対し、前述のキケローの目的は、理想的な市民育成にあったといえる。

V. 現　代

東方貿易によって豊かな商業都市が起こり始めると、ヨーロッパはルネッサンス期に入る。教会の力は衰退し、神学中心の思想よりも人間性を肯定する文芸復興の波がイタリアから全ヨーロッパに広がった。15世紀半ば、ドイツのグーテンベルグ(と言われている)による印刷機の開発を機に、本・雑誌・新聞などの印刷物の量が急激に増加した(稲葉、1994)。古代ギリシャ・ローマの古典も復興、再び一般市民のためのコミュニケーション理論が研究される機を得ることとなった。

そのルネッサンス期を経た1600年代からのコミュニケーション理論構築に関しては、おおよそ４つのアプローチが主流となり、人間同士の交流に主眼をおく研究が活発になっていく。Fenelonに代表される古典的アプローチ(Classical Approach)、Campbellに代表される心理・認識論的アプローチ(Psychological・Epistemological Approach)、Kamesに代表される美文学的アプローチ(Belletristic Approach)、そして、Thomas Sheridanに代表される雄弁術的アプローチ(Elocutionist Approach)等がある(Ehninger, 1952)。

この時代に起こった様々な社会的変動の中で、コミュニケーション理論の視点からみた最も重要な変化は、コミュニケーションの教育についての関心が高まったことである。中世で失われた古典レトリックの知識を、現代に適応する必要性が認識され、その努力が上記４アプローチの形で顕在化されていく。

A. 古典的アプローチ(Classical Approach)

Fenelon(1651〜1715)の著Dialogues on Eloquence (1679)では、プラトン・アリストテレス・キケローの古典に最も忠実なコミュニケーシション論を現代社会に適応させようとする試みが見られる。彼は、弁論家に必要な諸要素として、まず哲学者でなくてはならないこと、弁論の主題を熟知し、その聴衆の気質を把握すること、秩序正しい話をすること、聞き手の心をつかむこと、などを体系的に述べた。彼が目差した、レトリックを効果的なコミュニケーションとして捉える理論体系は、その後の研究者に多大な影響を与えた。

B. 心理・認識論的アプローチ(Psychological-Epistemological Approach)

George Campbell(1719〜1796)は、スコットランドの教会の神学者・牧師であった。彼の著Philosophy of Rhetoricは、現代のレトリック研究の名著で、18世紀から19世紀に掛けてレトリックの教科書として42回の重版が行われたという(Bitzer, 1963)。Campbellにとってコミュニケーションとは、人が物事を知り得る・信じる、そして行動することに関する理論構築上での基礎を成すものであり、その研究は理論と実践を備えた最も基本的な学問であった(Harper, 1979)。

Campbellは、Faculty psychologyをベースにして人間行動を理解しようとした。ファッカルティー・サイコロジーの唱える5 powers of the mind、一つに理解力(understanding)、二つに記憶力(memory)、三つに想像力(imagination)、四つに情熱(passion)、そして五つに意思力(the will)、(この中で最も強力なものは意思力で、他の４つはそれを支える補助的なものであると言う)は、コミュニ

ケーションを通して強化されると彼は考えた。従って彼は、コミュニケーションを、新しい情報を得る手段であるばかりでなく、意思決定をするための情報の使い方、として捉えていた。人はコミュニケーションを通して５つのファッカルティー（先天的能力）を磨き、意見・信条・理想を作り上げていく、つまり、社会現実を構築するというわけである。従って、Campbellにとってのレトリック研究とは、人が現実を構築する過程を説明するための理論構築であったと言えよう。

Campbellは、自身の研究を基本的にニュートン科学的なものであると考えていた。まず、人間の行動を観察(observation)し、分類する。そして、より一般的な概念や因果関係を発見し、体系化する。彼にとっては、レトリックはtheory of "eloquence"（効果的なコミュニケーションを模索する理論）であって、スキルのみの教育ではなかった(Campbell, 1776)。「現代のレトリック（コミュニケーション理論）はCampbellに始まる」といわれている所以は、この点にある。

Ｃ．美文学的アプローチ(Belletristic Approach)

Henry Home, Lord Kames(1696～1782)は、弁護士であり、又、農学者でもあった。古代の裁判のケースを研究していた彼は、理論構築に欠かせない批評能力に視点を置き、Elements of Criticism(1762)を記した。彼は全ての芸術――演劇から庭作りまで―――同じ木の枝葉であると考え、あらゆる芸術を偏見無く評価できる普遍的な基準を模索し1000頁に及ぶ本を書きあげた。第一巻で人間性と芸術性について、第二巻でレトリックと詩について論述する中、その視点は言語の持つ力に重点的に注がれた。彼にとって言語芸術（詩・演説・演劇などのランゲージ・アート）は、"speech as contributing to so many good purposes"(ibid.,II,p.13), "to unfold the human heart; for what other science is of greater use to human beings？"(ibid.,II,p.19)、つまり、人の心を開く手段であり、人間社会に多くの利益をもたらす学問であった。"To connect individuals in the social state, no particular contributes more than language, by the power it possesses of an expeditious communication of thought, and a lively representation of transactions"(ibid.,II., p.362)、つまり、生き生きとした表現で人間の思考を伝達する、人と人、そして、人と社会を繋ぐ、他の何物も及ばない力を持ったもの、である。彼にとっての芸術評価の基準とは、芸術作品の出来の良し悪しを定める物差しではなく、人間性(human nature)を探る過程において見出され洗練されていくべきツールであり、相互の善意と親愛、"mutual goodwill and affection"(ibid.,I., p.10)を奨励するコミュニケーション能力を測るツールであったと言える。

Ｄ．雄弁術的アプローチ(Elocutionist Approach)

Thomas Sheridan（1719～1788）は、18世紀のElocutionary Movementのリーダー的人物として知られている。Elocutionary Movementが始まった理由は主に２つあると考えられている。一つは当時（特に聖職者）の演説・説法がその発音や声の使い方において衰退していることが危惧されたこと、二つ目は政治や演劇などの分野では特に、地方の訛りを出さない方が良いと考える新しい動きが始まったことである(Harper, 1979)。アイルランド人のSheridanも、そのアイリッシュ・アクセントの故に、彼自身のキャリア形成上不利を被ったと感じていたようだ。その著、British Education(1756)で、ブリティッシュ・イングリッシュの標準化について論じている。

Sheridanのみならず、Gilbert Austin(1753～1837)も、その著Chironomia, or a Treatise on Rhetorical Delivery(1806)に、言語の標準化について記し、また、手・足および体の使い方まで図解した。しかし、現代のコミュニケーション研究者の間では、彼らの指摘した内容は表面的なものでしかなく、理論構築の上では大きな貢献とはならなかったという評価が多い。

こうした、４つのアプローチ―――古代のレトリックを反映させようとするものから発音上の訛りの問題に着目した内容まで―――で幅広い領域に渡って理論構築の試みがなされたが、

それでもまだ21世紀の現在と比べ、その内容はまだ統一的な性格を持ったものであった。その後1900年以降のコミュニケーション研究の発展はめざましく、近代科学の叡智をとりいれた、実に様々な研究手法が可能になり、多くの理論が打ち出された。

コミュニケーションの起こる状況（context）という観点から分類し、その代表的なものを選ぶと、対人コミュニケーションの、Mead's Symbolic Interactionism, Altman and Taylor's Social Penetration Theory, グループ及びパブリック・コミュニケーションの、Bormann's Symbollic Convergence Theory, Kenneth Burke's Dramatism, マス・コミュニケーションの、McLuhan's Technological Determinism, Reeves and Nass' Media Equation, 異文化コミュニケーションの、Gudykunst's Anxiety/uncertainty Management Theory, Ting-Toomey's Face Negotiation Theoryなどが挙げられる。他にも、Kurt Lewinによるグループ・リーダーシップや意思決定プロセスに関する研究、Ray Birdwhistellによる異文化を含む非言語コミュニケーションの研究、Edward T. HallによるProxemics（スペースの使い方）研究、Shannon&Weaverによるthe Mathematical Theory of Communication、そして、P. Andersen（我が恩師の一人）等による非言語（nonverbal）コミュニケーションの研究など、数学・心理・社会・文化人類学者等の研究を含む幅広い領域横断的なアプローチで、研究が精力的に進められている。

ジャーナルも、様々な分野、Interpersonal Communication, Cognitive Processing, Relational Development, Group Decision Making, Organizational Communication, Public Rhetoric, Media and Culture, Intercultural Communication, Gender and Communicationなどに分類され、多くの情報が得られるようになっている。

高年齢化が進む日本で、おそらく今後もっと関わり合いを持っていく領域は、医療分野であろう。すでに日本でもセカンド・オピニオンやインフォームド・コンセントなどの新しいコミュニケーションのあり方が導入された。Narrative Medicine等も研究され始めている。医者・看護婦や医者・患者間の、より効果的なコミュニケーションを模索する研究が、コミュニケーション研究者と医療関係者による相互の協力をもって行われることは、今後の理論構築という観点から見ても意義深い。

VI. 最後に

ここまで非常に大雑把に歴史を振り返ってきた。コミュニケーション理論の発展過程について、本稿を読む以前よりは少しだけでも、読者の理解と興味が深まったならば幸いである。

コミュニケーションの研究で扱われる問題領域は、あらゆる社会現象を巻き込む複雑なものにならざるを得ないため、理論構築上の学問的基盤やアプローチの方法も多種多彩である。従って、未だ、一つの独立した社会科学として承認されるほどには体系化されていないのが現状である。然しながら、様々な批判を受けながらも多くの社会科学の領域において研究が継続されてきたのには、それなりの理由があると思われる。恐らくその一つは「それぞれの分野における固有の問題分析のためにも、コミュニケーションの解明が重要な意味をもつからにほかならない」ことと、二つ目には「他の多くの領域における問題の分析に重要な手がかりを与えるもの」であるからといえよう(生田、1982:p.18)。従って、コミュニケーション理論の構築は、今後益々グローバル化する世界の中で、あらゆる分野の科学技術発展とともに、さらに幅広い領域で研究が行われ、より洗練されたアプローチと分析手法が開発されていくことだろう。

しかし、何のためのコミュニケーション理論構築かと問われれば、行き着くところは、人がよりよく生きるための手段を模索する必要があるからという答えになろう。コミュニケーションという言葉の語源は、ラテン語のcommunicareで、英語に訳せばto make common、つまり、共通のものを作る、の意である。稲葉は「両方の人間が同じ情報を共有する状態になる。これがコミュニケーションである」としている（稲葉、1994: p.7）。しかし、どのレベルまでの情報なのであろうか？ 何を共通にするのかラテン語に含

蓄された元々の意味はわからないが、同じ情報や感情の共有レベルにとどまらない、普遍的な原理・原則を意味しているのではないだろうか。コミュニケーションを研究するにあたっては、ソクラテスの言葉を借りると魂の世話をすると言うことになるだろうが、自分のみならず他者にとっても善い行いをする人間育成教育のあり方を模索する構えがその根源になければならないと思う。

とりわけ1930年代以降に見られるコミュニケーション研究の急速な発展は、一つにアメリカの「事業家たちが自分達と顧客と接触を保っていく方法を見出そうとして、マス・メディアの活動とその有効性についての有用な知識をことごとく集めようとしたこと」(生田、1995: p.19)という背景がある。事実、コミュニケーションの研究は学者だけでなく、組織の効率性や利益を得る目的でさまざまな企業でも積極的に進められてきた。それは特に先進国では経済・科学技術の発展に伴い、生活基盤の近代化、効率化に大きな比重がかけられてきたからであろう。しかし、そもそも、より便利な文明生活を欲する人間の、その存在そのものへの問いかけを忘れたコミュニケーションの理論構築では、あらゆる先進科学技術の分析手法をもってしても、表面的な人間理解に終わるのではないだろうか。稲葉もまた我々に警鐘を鳴らす。「『コミュニケーション手段の技術上の発達』だけでコミュニケーションの成否を考えるとしたら、これまたきわめて『単純な見方』だと言わねばなるまい。(中略)ぜひともコミュニケーションを成立させようという社会の意思、つまりは『合意』がなかったならば、コミュニケーションを不能にし、形骸化させてしまう諸条件・諸要因を、除去・克服することだってできはしない。」(稲葉、1994:p.270)と。偉大なる哲学者達の叡智をもってしても、ペロポネソス戦争後、ポリスの枠が崩れていく時代の流れの中、善きポリス人を育成するという課題を存続させることができなかった。それにもかかわらず、ソクラテスが魂に着目し、その善さを追求しようとしたことは、今日でもなお重要性を失っていない。なぜか。人間は、その善さとは何であるのかが分からないままに、善く生きようとしている。この事実は、ソクラテスの時代から現代に至るまで少しも変わっておらず、これが尽きることのない問題の源泉となるからである。」(北畠、2000:p.222)。いかに時代が移ろうとも、コミュニケーションの研究も、この視点を見据えつつ、行われなければならない。

(青森公立大学)

(2005年6月15日受付、2005年6月21日受理)

参考文献

Augustine. (1952). *On Christian Doctrine*. In J.F.Shaw (Trans). *Great books of the western world* (Vol.18). Chicago:Encyclopaedia Britanica, Inc. (Original work published 426)

Austin, G. (1966). *Chironamia: or a treatise on rhetorical delivery*. M. Robb & L. Thonssen (Eds.). Carbondale: Southern Illinois University Press. (Original work published 1806)

Bertlanffy, V.L.,(1969). *General system theory:foundations, development, applications* (Revised Edition), NY:George Braziller

Bitzer, L.F.(1963) Editors' Introduction to George Campbell, *Philosophy of rhetoric*, Carbondale:Southern Illinois University Press

Campbell, G. (1832). *Lectures on systematic theology and pulpit eloquence*. Boston:Lincoln and Edmonds

Cicero. B.(1942). *De oratore*. H. Rackham (Trans.). Loeb Classical Library. Cambridge: Harvard University Press (Original work published 55B.C.)

Cohen, H. (1994). *The history of speech communication: the emergence of a discipline, 1914~1945*. Anandale: Speech Communication Association

Craig, R.T.(1989). Communication as a dractical discipline. In B. Dervin, L.Grossberg, B. O'Keefe, & E. Wartella(Eds.), *Paradigm dialogues in communication*. (Vol.1, pp.97-122). Beverly Hills: Sage

Durant, W.(1939) *The life of Greece*. NY:Simon and Schster.

Ehninger, D. (1952). Dominant trends in English rhetorical thought, 1750~1800, *Southern Speech Journal* (Sept.), 3-11.

Fenelon (1951) *Dialogues on eloquence*. Wilbur S. Howell (Trans.) Princeton: Princeton University Press. (Original work published 1679)

Friedrich, W.F. & Boileau, D.M.(1999). The communication discipline. In Vangelisti, A.L., Daly, J.A., Friedrich, G.W.,(Eds.) *Teaching communication*.:Theory, research, and methods. (pp.3-13) Mahwah:Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

Griffin, E. (2003). *A first look at communication theory*, NY:McGraw Hills Co., Inc.

Guthrie, W.K.C.(1971). *The sophists*. Cambridge University Press
Harper, N.(1979). *Human communication theory:the history of a paradigm*. Rochelle Park:Hayden Book Co., Inc.
Hovland, C.I., Janis, I.L., & Kelley, H.H.(1953). *Communication and persuasion*. New Haven:Yale University Press.
Infante, D.A., Rancer, A.S., & Womack, D.F.(1993). *Building communication theory*. Waveland Press, Inc.
Kames, H. H.(Lord). (1971). *Elements of criticism*. NY: Garland Publisher. (Original work published 1762)
Kennedy, G.A.(1980). *Classical rhetoric and its christian and secular tradition from ancient to modern times*. Chapel Hill:University of North Carolina Press.
Morison, S.E. (1935). *The founding of Harvard college*. Cambridge: Harvard University Press.
Schutz, A. (1967). *The phenomenology of the social world.* Chicago, IL: Northwestern University Press.
Sheridan, T. (1971). British education or the source of disorder of Great Britain. In Howell, Wilbur S.(Ed.) *Eighteenth century British logic and rhetoric*. Princeton: Princeton University Press. (Original work published 1756)
Speech Communication Association. (1994). *1994-1995 Speech communication association directory*. Annandale: the Speech Communication Association.
Sprague, J. (1999). The goals of communication education. In Vangelisti, A.L., Daly, J.A., Friedrich, G.W.,(Eds.). *Teaching communication: Theory, research, and methods*. (pp.15-47) Mahwah:Lawrenece Erlbaum Associates, Inc.
Thonssen, L., Baird, A.C., & Braden, W.W.(1970). *Speech criticism*. NY: Ronald Press
Winch, P.(1958). *The idea of a social science and its relation to philosophy*. Atlatic Highlands:Humanities Press.
Zeller, E.(1980). *Outline of the history of Greek philosophy*. W.Nestle, Rev.; L.R.Palmer(Trans.). NY:Dover (Original work published 1931).
生田正輝(1995). 「第二章　コミュニケーション研究の発展とその理論」 慶応義塾大学研究所（編）『コミュニケーション行動の理論：インターディシプリナリー・アプローチ』慶応通信（株）pp.17-39.
稲葉三千男(1994).『コミュニケーション発達史』創風社
内山勝利(1998)「ヘラクレイトス」『岩波哲学・思想辞典』岩波書店
キケロー著、大西英文訳(2005)『弁論家について』（原著　55B.C.）
北畠知量(2000).『ソクラテス：魂の教育について』高文堂出版社
高野義郎(2002).『古代ギリシアの旅：創造の源をたずねて』岩波新書
丹治信治(1998)「理論」『岩波思想・哲学辞典』岩波書店
L. ベルタランフィ著、長野敬・大田邦昌共訳(2001).『一般システム理論』みすず書（原著1968）
三嶋輝夫 (2000).『規範と意味：ソクラテスと現代』東海大学出版社

Abstract

This paper gives some basic information about theoretical developments in the communication studies field. The goals, functions, and significance of the communication discipline are discussed in the introduction. Three major paradigms, or theoretical perspectives, are introduced in the main part: the covering law perspective, the human action perspective, and the systems perspective. To see differences among those three paradigms, one or two representative theories of each era from ancient Greece to the present are also introduced.

Greek word *rhêkorikê* means the art and technique of a *rhêtôr*, or public speaker. Since all communication involves rhetoric, I wanted to see what changes and developments in the discipline have been transmitted from classical rhetoric to the Middle Age, and then to the present. In the ideas of thinkers from both the past and the present, we will find the reason why the theories of the art of language and communication have been passed from generation to generation.